

NHK東京第二放送「宗教の時間」

放蕩息子

――ルカ伝第15章11～32節――

1976年10月31日

小池辰雄

聖書はドラマ 父との断絶 自己義認 平伏す者に無条件の赦し 心の向きを変える 降参す
るとその中に入れる 自分を投げ出していく 新しく生きる

●聖書はドラマ

ただいまから、新約聖書ルカ福音書の15章にある「放蕩息子」のお話をいたします。
ところで初めに、聖書は、普通なにか教えのように思っておりますけれども、それよりもむしろ、聖書の中身は、私はドラマ、劇だと思っております。それで、聖書に対する気持としましては、

「その劇中の人物に自分がなつて親しくこれに触れる」という、そういった気持でお読みになることが大事だと思えます。

キリストが「放蕩息子の譬話」たとえをなさいましたが、これもまさに非常に劇的に語られております。内容について、今これから申し上げます。

ある人が二人の息子をもつておりました。弟がお父さんに、「お父さん、私に財産のうちの私の分け前をください」と言いました。

それです。それで、お父さんは身代を兄と弟に分けてやりました。ユダヤにおいては、兄さんが二倍で、弟がその半分といったような分け方になっております。

しばらくして、弟は自分の持ち物をみんな集めて、遠い国に参りました。ところが、そこで放蕩に財産を費やしてしまつて、非常に困ることになりました。しかもおまけに、その国に大きな饑饉が起きて、もうにっちもさっちも動けなくなる。それで、その土地のある人によりすがつて、糊口ここうをつなごうとしました。やつと、そこで豚を飼わせられるということになりました。豚の食べている蝗豆いなごまめというようなもので、かろうじて食を得ていたわけです。

ところが、いよいよ自分が困りぬいてしまったものですから、我にかえつて、

「お父さんのところにはたくさん雇い人もいるし、また、食物もある。自分はもう

ここで飢え死にしようだ。やつぱり、お父さんのところへ帰ろう」と

と言って、戻つて行きました。

お父さんは実は、そうとう時がたつので、息子はどうしているかなと、これを心配して



いたわけですが、ある夕方、外を見てみると、遠くからある影が見えまして、これは人かあるいは獣かと思われるくらいな惨めな姿が見えたわけです。お父さんはその恰好で弟といることにすぐ気がついたものですから、急いで走って行って、その首に抱きついて接吻をしてやる。こういうようにしてお父さんは迎えました。

子どもは、

「お父さん。私は天に対して、またあなたの前に罪をおかしました。今からあなたの子どもと称えられるに値しません。どうぞ、雇い人の一人としてお使いください」と言いました。ところが、お父さんはこれに対して非常に喜ばれまして、

「はやく、最上の衣を持ってこい」

と、僕どもに言いました。さらに、手には指輪をはめてやったり、足にはサンダルを履かせたりして、また、それに肥えた子牛を屠^{ほぶ}つてやって、そこで饗宴を開きました。

「自分のこの子は死んだも同然だったが、生き返った。亡くなったも同然だったが、

また得られた」

と言つて、非常に楽しみ始めたわけですよ。

ところが、その弟の兄が畑で仕事をしていたのですが、夕方になって家へ帰って来ると、歌舞音曲の音がするので、これは何事かと思つて、僕の一人に聞いたたら、答えて言うのに、

「あなたの兄弟の弟さんが帰つてきました。無事だったので、お父さんがこのようにして迎えていらつしやるんです」

と。すると、兄さんは怒つて、家に入ることも好まないでおりましたが、お父さんがやつて来て、

「まあ、入れよ」

と言つたのですが、これになお肯^{がえ}んじませんで、

「どういうことですか、お父さん。私は何年もあなたに仕えて、まだあなたの命令に背いたこともありません。それなのに、小山羊一匹でも与えてくれないし、また、友だちとそのようにして楽しませてくれませんでした。ところが、私のこの弟が遊女たちと遊んで、そして身代を食いつくしてしまつた。そんなのが帰つて来たからといって、こんなにもてなすとは何事ですか」

といったようなことを言つたわけです。ところが、お父さんが、

「子よ。お前はいつも私と一緒にいる。私のものはみんなお前のものだ。お前の弟は死んだようなわけだったが生き返つた。また、失せたわけだったがまた得られた。そこで、私たちがこのように楽しむのも当然ではないか」

と、こう言いました。

●父との断絶

以上が、キリストが譬話として語られた内容です。私たちはこのことを見まして、この話はどういうことを語っているかということをつかんでみたいと思います。

兄の方はいわば品行方正、学術優等といった立派な道徳的な兄だと思えます。弟はそれと正反対ですが、ちょうど、四角(□)に対して、片一方が三角(△)といったような表現をしたらいいかと思います。お父さんは丸い(○)わけです。真ん中に○(父)があつて、右に□(兄)があつて、左に△(弟)があると、こう考えてみてください。

その△の弟は遠くに行つてしまつた。即ち、お父さんと自分とが切れた。しかも、弟は大いに自由独立というような気持でやっている。そのことは結構なんです。しかし、父との間柄が切れたということ。これは人間の在り方として、非常に重大な問題をはらんでいます。

「ひと」という字は、『大言海』(辞書)を見ますと、「^{ひと}靈止」、「^{とど}靈が止まる」と書きます。神霊をいただいて、神霊が止まつているのが本当の人間の姿だというわけなんです。ところで、

「宗教」「レリギオ」

という言葉は、

「再び結ぶ」

という意味をもと持つていたという説と、

「また思い返す」

というように意味にとる説とがあります。どちらにしても本質的な意味は同じだと思えますが、

「絶対なる神・仏と結び返す」

ということが宗教ということ、

「そこに思いを返す、帰り行く、本源のところに帰り行く」

というのが宗教という言葉の本来の意味なんです。

そのことを思うと、人間はみんなそういう在り方が本来の在り方である。西郷南洲も

「敬天愛人」

と言いました。一般に

「天」

という言い方で言つても結構なんです。その点において、今この現代人が「自由」とか「自主」とか言いますが、本来そういった宗教的な角度が一番根底になければならないということ、私は思っています。民主主義といいますが、本来、リンカーンあたりも、

「アンダー・ゴッド」「神の下において」

ということをあの有名な演説でも申しておりますが、この点において自覚を新しくしなけ



ればならないと思います。

弟の在り方が即ち、父と離れてしまった、断絶してしまった。「父」において「神」がこの場合考えられているわけですが、神と人との関係がそのようにして切れてしまった。しかし、そのことに気がついた弟は――そういった、切れている姿を私は「破れ」と言いたい――人間のこの「破れの姿」に気がついて、それから戻っていかうとした。砕けた気持ちで元へ戻っていく。心が砕けて、そして戻っていく。これが即ち、本当に宗教的な角度なんです。

●自己義認

片一方の兄さんの方は、お父さんのすぐ近くにおいて、非常によかった。それ自体は結構なことです。兄さんは、弟が帰ってきて――お父さんが非常に喜んでこれを迎えた――これに対して立腹した。それはある意味において当然です。

けれども、彼自身は結構だったんだけど、実は父の心を心としていなかった。だから、彼は弟が帰ってきた時にお父さんと同じように、

「よく帰ってきた。今度はやり直そうね」

と言えば、たいへん兄らしい兄なんですが、そこが間違った。

自分を善しとして他を見下す姿、そういう角度、これはキリストが「パリサイ」と言つて非常に嫌われた角度なんです。

キリスト自身が、ある青年が

「善き先生」

と呼んだら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまのほかに善きものはないんだ」

と言って、彼は本当に神の前に自分を何者ともしておりませんでした。

そのようにして、絶対者と本当に一つになっている姿。それは自分をゼロにすると無限大になるというような角度になるわけです。そういった本当の平伏しの、私のない、無私のこの角度がキリストの在り方でありました。

兄さんがそのようにして、お父さんの心を心としていけば、本当の兄さんでしたが、そこが兄の大きな間違いだった。即ち、ここに二人の人があって、片一方は相対的には結構なんだけれども、ある絶対的な角度をもっていなかった。そこに人間が人を審く恐ろしい嫌らしい角度が出てくるわけです。

もう片一方は、弟が△で、これはもちろん断絶はよくなかったけれども、戻ってきた。このことが大変結構なんです。この兄と弟との在り方に、人間の在り方の二つの大きな分け方というものがあると思う。即ち、

「自分が悪かった」



と言って心が碎けるか、あるいは碎けないか。

人間は、砕けの心、神の前に、神仏の前に本当に平伏す心、これがないところには、本当の平和はこない。しかしながら、神仏との交わりを本当にしているところに、そこに本当の魂の、心の平安があります。そこで、この

「平安」

という言葉を私はこの縦の関係においてはつきりと自覚したいと思う。

「平和、平和」

と言いますけれども、平安という縦の関係のないところに、本当の横の関係の平和というものはない。もし、そうであるなら、それは偽りの平和であるというようなことを思わざるを得ないんです。

その意味において、この弟は父のもとに帰ってきて、そして本当の平安の場に入ってきた。また、兄さんは近くにいたんだけど、実はそれは本当に父とは一つになっていない。己を立てていた。この

「己を立てる」

ということがやはり、これが非常に人と人との関係をこわす。

たとえば、いろんな主義主張があります。それぞれ真理性をもっています。けれども、そこには限界がある。そのことを自覚しないで、その相対的な主義主張を主張すれば、これはもう喧嘩になるに相違ない。これは個人の間でも、社会においても、国際関係においても、私はそうだと思います。

それぞれの善さを認識しながら、しかし、

「もうひとつ絶対的なところは何か」

ということが大事なわけです。これはやはり、本当の意味において

「人間である」

ということなんです。人種の差別ではない。本当に人間であるためには――それを

「如来」

と言おうが、

「神」

と言おうが、信仰の対象はそれぞれですが――とにかく、絶対的なそういう角度の在り方というものをもういつぱん世界の人たちが自覚しなければならぬ。

我々は日本人として――本来、日本人はいい角度をもっているはずなんです。非常に性質のいい、また才能も豊かな日本人なんです――この大事な一番根底のことを忘れていくのではないか。

私は教育の方にはたずさわっておりますけれども、教育の面においても、先生というような立場にある方々が本当にこの点において新しく醒める必要があるのではないか。本当の



教育の根底はそこからくるのではないか、ということをつくづく思っております。

自己義認の兄さんの角度も、また、父から離れていった手離しの独立も、どちらも間違いであった。しかし、弟は

「悪かった」

と言って帰ってきました。兄さんは、そのところがまだ釈然としなかったようですが。

●平伏す者に無条件の赦し

ところで、最後にこのお父さんですが――この「父」においてキリストは「神」を考えていらつしやったと思いますが――

「悪かった」

と言う者にはもう無条件にこれを赦す。そして、本当にこれを迎える。この弟が回生して、

「また生きた、また得られた」

と言って、この父は喜びました。

そのようにして、神の前にはいついかなるときでも無条件に平伏すということが、

「元へ戻る」

ということ、これが宗教の本来の姿です。それが本当の前進であると思うんです。どうせ、人間は躓いたり転んだりします。けれども、いつも元へ戻ることが大事です。

文化の面におきましても、今、科学の世界がどんどん進歩していますが、精神文化の面ではむしろ元へ戻るということ、古典に帰るということが非常に大事な面だと思います。いろいろな東西古今の古典的な第一級のもの、これに対して目を向けること。そして、歴史のそういった意味における新しい自覚の仕方、認識の仕方ということが是非とも必要です。それにおいて初めて、20世紀のこの文化文明も正しい角度になると思います。

宗教というものは、他の文化現象とは違って、どうしても根底になければならぬということを私は思わざるえません。たとえば、木に例えると、根っこの世界が宗教であり、幹の世界は道徳の世界で、枝葉花果がもろもろの文化文明の世界であると、このように例えられます。

人間がとにかく営むことは、根底は人間なんですから、人間の一番の中心は心の世界なので、もし、心の世界がおかしなことになれば、恐いのは原子力ではない。原子力を使う心がこわい。この心の世界にもういつペン新しく本当に戻らなければ、世界歴史がどんなことになるかは知れません。

そういう意味において、非常にこの宗教の世界は重要な問題である。

「万人は本来宗教人である」

ということ、私は言わざるをえません。

この父の愛に、本当にこの弟は感激したと思うんです。これはただ感激ばかりではなくて、



お父さんにこのようにして迎えられると、父の生命が、愛の生命が彼に伝わる。そうすると、本当に新しく、新しい生命に甦える。今までの生まれつきの自分とはちがったことになる。これが、

「死してまた生き、失せてまた得られたり」

とキリストが言っている言葉の本義だと思います。

キリストが他のところでも、

「人新たに生まれずば、天国に入ることができない」

と言ったのは、その意味において、心を新しくするということです。

●心の向きを変える

宗教改革記念日は10月31日ですけれども、マルチン・ルターがああ有名な――あれは1517年の10月31日ですが――九十五箇条をヴィッテンベルク城教会の門扉に貼りつけたわけですが、その時に、

「キリスト者の生涯というものは全生涯が悔改めである」

ということを書いた。

「キリストの言葉に『汝ら、悔改めをなせ』と言われたときに、このキリストの言葉は

全生涯を通して我々は悔改めていけということだ

という。

「悔改める」

という本来のギリシア語は、

「向きを変える」

という字なんです。心の向きを、

「地ではなく、また他人でもなく、己でもなく、天界に向かって、神に向かって、

仏に向かって、心の向きを変える」

ということが、この「悔改め」という言葉の本来の意味です。非常に積極的な意味なんです。

「常に新たに天界に向かって行け」

と。それが本当の前進である。ちょうど、磁石がどんなに揺れても、いつも北極を指します。

そのように、磁性をおびれば北極を指す。

我々もまた、神・仏の霊に触れれば、人間は躓いたり転んだりしますけれども、常に新たに起き返っては前進していくというのが、「悔改め」という意味です。

「全生涯が悔改めであれ」

ということとは、

「全生涯が転向また転向、天に向かって、本当の世界に向かって、前進また前進せよ」

ということが本来の意味です。これが宗教改革の、ルターが掲げた最初の言葉なんです。



そういう意味において、いついかなる時も決して遅くはない。気がついたときに、即ち男らしく兜かぶとを脱いで進んでいくことです。

●降参するとその中に入れる

この聖書の世界も、

「聖書は一体何が書いてあるだろうか？」

と言って、いくら研究したって――それはまあ、外側のことは分かるでしょうけれども――これは本当の聖書の世界には入れない。

聖書の世界に本当に入ろうとしたらば、さきほども申し上げたように、ドラマですから、その中に自分をぶつけていく。たとえば、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという福音書は、キリストが実際そこで動いていますから、キリストが言ったりしたりしているその中に自分を投げ込んでいくことです。そのようにして行くと、とてもキリストにはかなわん。それで、降参します。

「本当に参りました！」

と言って降参すると、その世界に入れるというのが、この聖書の本当の読み方であると、私は自分の体験から申し上げます。

ヨーロッパとか何とか言うのではなくて、世界の精神文化の一番根底になっているのは、このキリスト教と仏教です。

仏教も、日本には第一流の坊さんたちが素晴らしいものを残しています。たとえば、『歎異抄』あたりは私も大好きですが、とにかく、一流のものに食いついて、そして、その同じような次元に自分を入れていく。そのためには、自分を投げ込んでいくことです。そういうことが古典に向かっていく非常に大事な姿だと思う。普通の文学でも哲学でも、その作者の心になるということが一番大事だと思います。

この聖書を柵の上に置いたり、また別にもつたいぶつたものとせず、これはシェークスピアのドラマもこの聖書一卷にはかなわない。あらゆるあちらの素晴らしい文学も、源泉はどこから来ているかというところ、これはみんな聖書からきてます。

そういう意味において、ぜひとも、聖書を柵の上に置いたりまた別にもつたいぶつたものとせず、聖書に対する新しい認識をしていただいて、これにぶつかっていただきたい。自分でそういった気持ちで読めばいいんです。読むということ、ぶつかっていくこと、また、その中に自分を投げ入れていくこと、降参すること、これが実は祈りの姿なんです。祈りというのは、何かお願いすることよりも、自分自身をその中に入れていくということが祈りの本当の境地なんです。そうすると、そこから、何だか知らんけれども、新しくどんどん展開していきます。



●自分を投げ出しつゝ

キリストが、

「わが意こころにあらず、汝の意を成させたまえ」

と、そういうようにして申しました。お願いはあるけれども、しかし、自分の意こころではありません。あなたの思うところをやってくださいと。これは仏教的な言葉でいうと、

「本願を成らせてください」

ということでした。私は仏教のこの「本願」という言葉が大好きなんです。

「神の本願が成るように」

と言って、自分を投げ出していったのが、このキリストの在り方です。お釈迦さんでもそうですね。そういった本願を受けとっていく。そうすると、自分を投げ出していくと、その驚くべきものが自分の中に入ってきました。そして、展開が始まる。

若い方々が、いろいろな勉強や何かでも、その勉強の本当の力はそういった角度の在り方から出てくる。宗教のことは決して後生願いでも何でもなく、日常生活の一番根底になる力を与えるところの世界です。しかも、それは仏教では

「慈悲」

と言ひ、キリスト教では

「愛」

と言ひ、老子は

「道」

と言つてます。老子が道と言いますが、私は

「キリスト教」

と言うよりも、むしろ

「キリスト道」

と言つております。日本人は本来、道の民で、茶道、華道、書道、柔道、剣道、弓道といった、本来、真理を身に体するという角度を日本人はもっていたわけです。ぜひとも、そういう角度の真理のつかみ方、ものの学び方ということを新しく自覚していただきたい。私たちは――仏教であっても、キリスト教でもいいですよ――とにかく、本ものにつかつて、そして、何かしらなければ、

「これは頭の世界ではない、全存在で受けとっていく世界だ、そして、本当に生命が来る世界だ」

ということをそれぞれ体験していただきたいと思うわけです。

●新しく生きる

この「放蕩息子の譬話たとえばなし」は、そういう意味において、非常に深い真理を私たちに語つて



いると思います。

要するに、人間が神の前に本当に砕ければ、神さまは無条件にこれを受入れて、そして、ただ赦すばかりでなくて、力を与える。新しく生きるということです。

また、兄さんが頑なでしかたけれども、その頑なは相対的には良かったけれども、実はそういう世界ではない。もっと、絶対的な角度に入っていけば、人の善さというものをいくらでも認めていくことができるし、また、人が

「私は間違った」

と言えば、

「本当にそうだ」

と言って許してやることができる。即ち、父の心を心とすることです。

これは父と子というような角度になっておりますが、日本におきましても、民主主義でもってヘタすると、親と子の秩序が失われてみたり、あるいは先生と生徒の間の関係が何かおかしくなってみたりする。私は、やはり昔の師道、孝道ということが正しい意味における民主主義と決して矛盾するものでないということをはつきりと申し上げたいと思います。

日本人がもっていた歴史の善きものは本当に生かして、新しく現在と未来を創造していくということに日本の歴史に対する本当の責任がある。戦争に負けたとか勝ったとかいうことではなくて、もつと深い自覚をこの絶対的な角度からもっていきたいと思います。

私たちは、「放蕩息子の譬話」が決して単なる譬話ではなくて、我々に身近な、我々に迫るところの現実を語っているというところをここにおいてははつきりと見て、そして、進んでいきたい。キリストの譬話はまだまだたくさん他にありますけれども、この放蕩息子の譬話はその中の最たるものであると言ってもいいと思います。

